

記録
16ミリ
カラー／29分
日・英・西・
インドネシア語版

- 企画
文部省
- 指導
東京大学医科学研究所
寄生虫研究部

スタッフ
■原作
佐々 學
■製作
村山英治
■構成
渡辺正巳
■撮影
戸田祥一郎
■音楽
岡田和夫
■解説
城 達也
川田政甫（英語版）

1971年教育映画祭最高賞 第27回東京都教育映画コンクール金賞
第13回科学技術映画祭科学技術庁長官賞・財団賞 第26回国際科学
映画祭最高名誉賞 マドリッド大学映画祭最高賞シルバースワン賞
第15回ニューヨーク国際TV&フィルム映画祭ブロンズ賞 日本映
画ペンクラブ推薦 1971年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第7位

ヘドロ、光化学スモッグ、鉛公害等々、現代社会には私たちの健康
を蝕む様々な形の公害が発生している。この映画は、生物を使って
人間の環境改善を図る試みを紹介する。



タイのバンコクで日本の研究者たちが、意外なことを発見した。ボーフラがいるはずのスラム街の水溜まりに、ボーフラはいなくて小さな魚がうじゃうじゃ繁殖していた。熱帯魚のグッピーである。その汚水のグッピーを調べてみると、他の魚が住めない汚い水に住み、よくボーフラを食べ、どんどん繁殖する。しかし寒さには弱く、水温が14度以下になると死んでしまう。グッピーは日本の冬を野外では越せないと思われた。ところが、日本にはもう1種類、寒さに強い舶来メダカが住んでいた。マラリアを媒介するハマダラ蚊のボーフラを退治する目的で、50年ほど前に東京周辺に放されたタツブミノウである。研究者たちは、地方の市町村や県衛生部と協力して川の多い町にタツブミノウやグッピーを住みつかせて、ボーフラの駆除に役立てた。その間に殺虫剤の研究も進んだ。殺虫剤の使用は、害虫駆除にかなりな成果を収めた反面、人や家畜の健康を脅かし反省の時期にきていた。有機リン剤のフェントロチオンは、DDTやBHCと違って極めて薄い濃度でボーフラを殺すが、魚には害がないことがわかった。実験の結果、枯草菌などの微生物がフェントロチオンの化学構造を変え、毒性のほとんどない化合物に分解してしまうこともわかった。こうした適当な薬剤と天敵をうまく併用することで、自然界を汚染することなく、害虫も駆除することができる。